氏　　名	岡本（おかもと）　文音（あやね）
学　　位	博士（芸術学）
学位記号	博（芸）甲第十五号
学位授与年月日	平成二十一年三月十四日
学位授与の要件	学位規程第三条第三項該当
論文題目	茶の湯と音楽
審査委員	主査　教授　倉澤　行洋
	副査　教授　関　隆志
	副査　教授　大村　皓一

平成二十年度宝塚造形芸術大学　博士学位論文審査報告要旨

茶の湯と音楽

一、本論文の要旨

われわれ現代の茶の湯愛好者および茶の湯実践者にとって、珠光から紹鷗、利休へと継ぐ草創期における茶の湯のありようは、今もって最大なる関心事のひとつである。そこには、われわれが茶の湯を実践するとき、規範となるべき利休像が常に念頭におかれてきたという茶の湯の事情が介在しているかもしれない。だがそれ以上に、われわれの心底に、草創期における茶の湯に魅力を感じ、茶の湯本来の姿や本質をそこに見出し、出来得ることなら体現したいという、漠然とした希求があるからであろう。

茶の湯は、一服の茶を喫するという行為を機縁として、茶室、道具、設えなどの空間的なものや、点前や所作などといった時間的なものなどの、さまざまな要素の複合により成り立っているのだが、遡る時代の茶の湯、たとえば草創期の茶の湯の精神や美的価値観、性格を論ずるとき、どうしても文献や道具などの、形として残されたものを考察対象とすることが主となってくる。現存する道具や茶室、道具名物記や描かれた茶室の図面からは当然のこととして、それだけでなく、文字によって残された茶人たちの言葉や、絵画のなかに描かれた茶の湯などから、用いられた道具や設え、茶室、点前や所作が考証されてきた。そして、それらの作業を前提として、草創期における茶の湯実践者たちの人物像などが考察され、茶の湯の美的価値観や性格が論じられてきたのである。しかし、音楽、もしくは音は、茶の湯の性格や美的価値観を論考するうえでの考察対象にされることは、皆無に等しかった。これは極めて不思議なことであり、かつまた残念なことである。それは、茶の湯という行為が、決して音の無い空間や時間によってなされてきたものではなく、それどころか、茶の湯において音は重要な役を担ってきたからである。

これまでに、音楽、もしくは音とのかかわりにおいての茶の湯の美的価値観や性格を論考したものは、吉川英史氏の「和敬清寂の精神と日本音楽」『日本音楽の性格』（一九七九）と中川真氏の「利休が聴いた音」『平安京 音の宇宙』（一九九二）の二つがある。吉川氏は、和敬清寂を茶の湯の精神をよく表す標語とし、日本の伝統的な音楽における和敬清寂について考察したものであり、中川氏は、音風景（サウンドスケープ）の研究による茶の湯論である。いずれも音楽学の立場からの茶の湯へのアプローチである。

音楽、もしくは音そのものは、時間の経過とともに瞬時に消え去ってしまい、文字という保存形態には馴染みにくいものではあるが、茶の湯の伝書などの文献に、音や音楽の記述は多少なりとも存在する。それらを検証し考察を加えることは充分に可能であるし、茶の湯研究においての必要条件であるはずである。それは先にも述べたように、茶の湯はさまざまな要素の複合のうえに成り立つものであるし、草創期から近世において、茶の湯を愛好し実践していた武家、公家、富裕な町人層にとって、音楽は必須な嗜みでもあり、また、享受されてきたからである。

本論稿の試みは、いままでの茶の湯研究において、焦点のあたることがなかった音も含めた音楽を考察対象とすべく、伝書などの茶の湯にかんする文献における音楽の記述を考察し、以て、室町時代後期から江戸時代初期の、茶の湯草創期から利休による大成を経て、発展・拡大へと向かう時期における、茶の湯の精神や美的価値観、性格を論考することである。なお、本論考では、音楽という用語を包括的な広義な意味で使用する。

古代から音楽には、人の情感のみならず天然自然や神仏の魂をも揺り動かす、人力の及ばない霊力が存在すると考えられてきた。しかし、音と音楽との境界線は、時代や地域によってかなり異なり、現代でも、環境音や雑音をも音楽に含めて考える概念が存在する。しかも、音楽という用語は中国起源の漢語であり、日本においても古くから用いられてきたが、音楽という用語自体の概念も古代から現代まで一定ではなかった。そこで、まず序章において、音楽という用語や概念の変遷を整理する。

第一章「茶の湯と能楽」では、能楽者の茶の湯を検証する。『南方録』において、曲尺割（かねわり）に基づく道具の置きかたについての秘伝である「峯

すり」の説明が、「音楽」という言葉を使ってなされている。利休の生きていた桃山時代、もしくは『南方録』が世に顕された元禄時代の「音楽」とは、雅楽の唐楽や高麗楽などの、渡来の器楽曲である「管絃」を主に指すと考えられるが、それらの時代における人々、少なくとも茶の湯を愛好し、実践していた茶人たちにとって、「音楽」という用語を使って、道具の置き合わせについての秘伝を説明することが可能だったということは、興味深いことである。桃山時代から江戸初期にかけて、茶の湯を愛好し実践していた公家、武家、富裕な商人たちは、茶の湯だけでなく、さまざまな芸能に親しみ、そしてそれらを身につけていたのだが、広義の意味での音楽的要素を持つものとして、雅楽と並んで能楽も含まれている。このような背景があるからこそ、『南方録』において、「音楽」という用語を使って、道具の置き合わせについての秘伝を説明することが可能だった、ということになる。これを換言すれば、「音楽」という用語を使って茶の湯の秘伝を説明できたということは、そのころの茶の湯の実践者たちに素養としての「音楽」があり、しかも、知識としてだけではなく実際に演じることによって、体内に音楽的な感覚をも、充分に兼ね備えていたということになる。そのような茶の湯の実践者たちが『南方録』の書き手であり、読者であったということである。そして、そのころの茶の湯が、そのような茶の湯実践者たちの手によって、培われ、磨かれていったということになるのである。

桃山時代から江戸初期にかけて、茶の湯と能楽をともに愛好し実践していた者の代表として、武家を筆頭に挙げることができるであろう。武家の能楽愛好についての研究は、天野文雄氏の戦国武将の能楽愛好についての研究著作『能に憑かれた権力者』など、これまでもおおくの業績があり、また、能楽をも愛好していたような武家の茶の湯研究の業績も多い。しかし、利休の後妻である宗恩の死別した前夫は、金春座傍流の小鼓方役者である宮王三郎三入であり、その兄でシテ方役者である宮王大夫道三に、利休も若いころ謡を習っていたことは、よく知られているところであるが、多くの能役者や手猿楽者が茶の湯を愛好し実践していたことは、これまであまり採りあげられてこなかった。『天王寺屋会記』『松屋会記』『今井宗久茶湯日記抜書』『宗湛日記』という、いわゆる四大茶会記には、多くの能楽の専門家および手猿楽者といわれるセミプロフェッショナルな能楽者が登場する。彼らは客として会記に名を連ねるだけでなく、亭主として、会記の筆録者である津田宗及、松屋久松、今井宗久、神屋宗湛などをもてなしている。会記から、相当な茶の湯愛好、実践ぶりを窺い知ることのできる能楽者も存在する。

第二章「『峯すり』考」では、『南方録』における「峯すり」の表現するズレの考察をする。先にも述べたように、『南方録』では、「峯すり」

という曲尺割に基づく道具の置きかたについての秘伝が述べられている。文中や絵図に数多く描出されたスリの表現を整理し、「峯すり」の説明が、「音楽」という言葉を使ってなされていることにも着目し、「峯すり」の表現するズレを考察する。

第三章「『五音ノ湯アヒ』考」では、茶の湯の音のなかでも極めて印象深い「茶の湯の釜の煮え音」に焦点をあて、まず、『南方録』において「五音ノ湯アヒ」とはどのような表現として用いられているのか、次に、古来、茶の湯を愛好し実践してきた人々は、茶の湯の釜の煮え音を、どのように聴き、そして、どのような存在として捉えていたのかを考察する。

元禄三年（一六九〇）成立の『南方録』には、利休の言葉に仮託して、茶の湯の釜の煮え音には「五音ノ湯アヒ」があることが記されているのだが、その当時、茶の湯の釜の煮え具合を段階に分け、それぞれに名称をつけることは、一般に知られていたことのようで、正保年間（一六四四－一六四八）に成立したと考えられている和泉流狂言台本『狂言六義』の「飛越新発意」の台詞で、「ぎう〳〵車せい、ゑんらうぶゐん」と、茶の湯の釜の煮え音に四音あることが語られている。一方、利休の高弟であった山上宗二は『山上宗二記』において、「第一雪之内ニハ有二炉中楽一、御釜ノニヱ音ハ松風ヲソネムニ春夏秋共ニ面白キ御遊興是也」と、能阿弥に仮託して述べ、釜の湯の煮え音を茶の湯の愉しみの眼目とし、また、千宗旦と親交の厚かった沢庵和尚は『結縄集』において、「茶の湯は天地中和の気を本として、治世安穏の風俗となれり。（略）松風の颯々たるを釜の中に聞て、世上の念慮をわすれ、瓶水の滑々たるを一杓より流して、心中の塵埃を洗う。直に人間の仙境なるべし」と述べ、茶の湯は人間の仙境であり、釜の煮え音を聞くことも、その境界にいたらしめる正鵠としている。

珠光において芽ぐんだ侘び茶は、紹鷗そして利休によって深化を遂げた。茶室も紹鷗の四畳半から、利休は天正十年（一五八二）ころに二畳敷の茶室をつくり、室床や躙口という今まで見られなかった工夫をし、数年後には一畳半の極小の茶室をつくりあげる。

十六世紀後半から約三〇年間（一五七七ころ－一六一〇）日本に滞在した、ポルトガル人キリシタンのジョアン・ロドリゲス通辞が著した『日本教会史』には、にぎやかな市中に草庵をかまえ隠退の境地をたのしむ、街辻の中に見出された隠退の閑居を「彼らの言葉で、市中の山居 xichû no sankio といっていた」と記されている。これを言い換えれば、「市中の山居」での茶の湯は、日常からの乖離のために切りとられた時間であり空間のなかでの茶の湯といえるのではないだろうか。そのように切り取られた時間と空間のなかでの茶の湯の音の世界は、いったいどのようなものであったのであろうか。そこで、第四章「茶の湯の音」では、茶の湯において、音はどのような役を担っていたのかを考察する。

二、本論文の評価さるべき特色

先ず、本論文の評価さるべき特色を列記してみる。

1. 茶の湯に密接な関係を持っていた芸能に能楽がある。茶の湯と能楽とは発展の過程において相互に影響し合っていた。当然、能役者で茶を行う者もたくさん居た。しかしこれら茶をたしなんだ能役者にいかなる人がいたかについてのまとまった論述はこれまで全くなかった。本論文の第一章「茶の湯と能楽―茶会記に登場する能役者たち―」は、この方面での最初のまとまった論考というべく、茶道ならびに能楽研究における基礎的な業績の一つと評価できる。

2. 『南方録』に、茶の湯の表現、特に道具の荘りにおいては、法則や型にぴったりはまり切ってしまうのはよくないとし、これを「峯すりの足」という語で説明し、この語は「楽人の秘書」に出ると記している。また「拍子」という音楽用語を用いて「拍子に合うのはよく、拍子にあたるはあし」ともいう。つまり型や法則にぴったり合うのはよくなく、少しずれているのがよいとするのである。第二章「『峯すり』考―『南方録』における「峯すり」の表現するズレの考察」はこのことについての論考である。岡本氏は結論として、峯すりということばで表現されるズレは空間的な概念に加えて時間的なものを併せ持つと指摘する。これは従来の「峯すり」論考に抜けていた卓見と評価できる。

3. 茶室で聞かれる音の中でも、釜の煮え音は、古来日本でも中国でも、茶人たちが風雅な音として注目してきたものであった。岡本氏は和漢の文献を渉猟して釜の煮え音についての多くの記述をまとめ、「蚯蚓」「ぎうぎう車せい」「ゑんらうぶゐん」などの、従来意味のはっきりしなかった語が、釜の煮え音に関わるものであることを明示した。これまでのこの方面の研究を超える業績と評価できる。

4. 第四章「茶の湯の音」においては、「沈黙の音楽」「静寂の音楽」の名のもとに、一会の茶会を音楽として把握しようとする。その立論には無理な強引さが目立ち説得力は弱いが、ともかく一会の茶会の全体を、音のある時のみならず無音の時をもふくめて一曲の音楽として把握しようとする意図には大いに共感を覚えるところがある。「一会の茶会を一曲の音楽として催す」―それは茶の湯文化の将来に新しい

展望を開くかもしれない。

三、　審査結果の要旨

本論文は、右のような評価されるべきいくつもの創見を含んでいるが、また欠点もある。その大きな一つは、本論文は「茶の湯と音楽」と題されているが、内容の大部分は「音楽」というよりは「音」についての考察である。またそれと関わることであるが、各章相互の内容に有機的な関連が乏しい憾みがある。

しかし右にも述べたように、本論文の根底に流れている意図が一会の茶会を音楽として把握し実行しようとするところにあることを知れば、標題と内容の、また各章相互の、有機的関連の弱さのよって来る由縁も理解できるところがある。要するにこの論考は、論者の意図を未だ十分には表現し得ていない、その意味で未完成なのである。だがこの未完成は将来における完成への期待を抱かせる未完成である。やや逆説的ではあるが、このような未完成をむしろ評価したい。小さな枠の中にきれいに収まり切れずに、次なる論考に結実されるかもしれぬ豊かな充溢をそこに見るからである。

以上の審査内容によって、三名の審査委員は、全員の一致をもって本論文を博士（芸術学）の学位に相当するものとの結論に達した。